

第1章 調査の目的と方法

1. 調査の目的

近年青少年の補導人員数は戦後第四度目の上昇局面を迎えたといわれており、またこの数年頻発している青少年による凶悪事件の発生は世間の注目を集め、社会生活上の不安の大きな要因ともなっている。このような青少年の逸脱行為の発生の背景的状况として、青少年が、自分自身の生活を十分肯定的にとらえることができず、自分自身を否定的に評価してしまい、いわば「幸せ感」を持たずにいる現状を指摘することができよう。自己の否定的な評価や将来の自分への希望、展望を持たないことは、現実の学校や職場で将来に向けてがんばっていかうとする「やる気」を疎外し、刹那的一時的な満足を短絡的に得ようとする逸脱的な行為に向かう傾向を助長するのではないかと考えられる。

本調査研究では、青少年の幸せ感、さまざまな自己の側面についての自己評価、全般的な自尊感情、将来成功できるという自信としての効力感、将来の自分の能力評価、将来への時間的展望、及び現在の学校での学習が将来役立つのかという学校の役割感について調査し、これらと逸脱行為や被害にあった経験との関係を明らかに、青少年の逸脱行為に関する諸問題を考察する上での基礎的資料を得ることを目的としている。

2. 調査対象者

発達的变化を概観することが可能になるよう学年の間を一定として、中学1年、3年生、高校2年生、及び大学1年生を対象とした。対象となった学校は、公立中学2校、公立高校4校、国立及び私立大学3校である。

調査対象者の内訳は下表の通り。

表1-1 調査対象者人数

	中学1年	中学3年	高校2年	大学1年	計
男	75	73	147	202	497
女	65	65	178	138	446
計	140	138	325	340	943

3. 調査項目

- (1) 逸脱行為[E]
- (2) 被害経験[F]と被害にあうことへの不安感[G]
- (3) 幸せ感[K]
- (4) 将来の成功の主観的可能性(効力感)[A]とその重要性[C]
- (5) 過去・現在・未来のとらえ方(時間的展望)[L]
- (6) 自尊感情[H]
- (7) 自己の諸側面の自己評価[I]とその重要性[J]
- (8) 将来の自己の能力期待[B]とそれぞれの能力おける学校の役割[D]

なお、上記の順序と調査表での順序は一致しない。各項目後ろの[]内のアルファベットが、付録にある調査表の質問項目のラベルである。

4. 調査方法及び時期

自己記入式で、各学校において一斉に実施した。調査時期は、平成11年10月～12月。

5. 調査企画分析委員

帝京大学文学心理学科内 青少年問題研究会

鎌原雅彦

馬場久志

伊藤忠弘

角野善司

麦島文夫